

今年も人形たちの夏は熱かった 人形劇カーニバル'97飯田



今年も、飯田のまちで、人形劇カーニバル'97が、八月七日から十日までの四日間、市内の各地で公演されました。今年、あの日、あの夏と共により、あなたの中では今でも、人形が動いていませんか。



発行所
飯田市竜丘公民館
編集人
竜丘公民館広報委員会
印刷所
龍共印刷株式会社
飯田市上郷黒田 ☎22-5353

人口	6,817人
男子	3,366人
女子	3,451人
世帯数	2,020戸
(9年8月末現在)	

人形劇カーニバルが生んだ 愛媛と飯田のきずな

二年前、人形劇カーニバルで長野原区民センター会場へ、愛媛から高橋清团长率の人形劇団「ぶか」がやって来た時のことです。その時、劇団を迎えたのが長野原文化部長中島広志さんでした。舞台は大盛況のうちに終わり、その夏も終る頃、高橋さんよりカーニバルの出合いや感動と喜びを綴ったお礼の手紙が中島さんに届きました。そこから、ぶかと中島さんとの親交が深まり、お互いに行き来が始まりました。そんなある日、中島さんが片足を失う事故に遭い、高橋さんは早速激励に来ました。又、中島さんはその時の気持ちを「一本足のり・スタート」という詩にして高橋さんに届けました。高橋さんは中島さんの強い生き方に感動し、それを題材に「ふたりのはなし」という物語を作りました。そして今年、竜丘に再び「ぶか」が子供たちの夢をトランクにいっぱい詰め込んできてくれました。「ふたりのはなし」を竜丘の人々には是非みてもらいたいという思いを込めて。当日、ぶかさんを沢山の人が迎えました。幕が

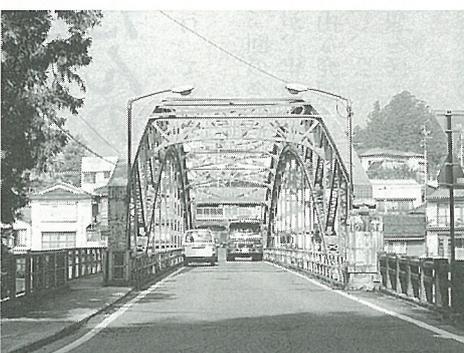


ぶかさんと中島さんの縁にカーニバルを通じ深い絆が結ばれる、そんなすばらしい一面があった事を知り、この様な輪がもっともっと広がっていくカーニバルを皆の手でつくって行けたらと思います。

天竜橋の架け替え 説明会開かれる

長年、要望してきた天竜橋の架け替え問題がいよいよ具体化し、六月五日に竜丘公民館で、竜丘・龍江の両役員を対象とした説明会が開かれ、同月二十六日には時又区民に対して説明会が開催されました。県では、平成十年度には詳細測量や設計などに着手したいとのことで、このための立入調査について地元として了解しました。このことで、事業が順調に進めば、工事着工後三年程度で新天竜橋が完成する見通しになってきました。現在詳細測量や設計に着手していませんのであくまでも予定ですが、位置は現在の天竜橋の下流で、今の

橋に近い地点になる見通しです。これにより、竜丘側でも家屋移転を伴うことになりませんが、交差点の改良というところで、既存の県道の一部も改良されることが予想されます。橋の延長は約百メートル、幅は十一メートルという事です。車道部分が六メートルで歩道が三・五メートル(片側のみ)です。残りは路肩で、今の橋よりかなり幅広になりそうです。現天竜橋は昭和十年に架けられました。橋自体も老朽化して



老朽化が進む天竜橋

実りの秋を迎え、稲刈りをする姿があらこちらで見られるようになった。となると必ず話に出るのが米の作柄である。今年度は度重なる台風と、梅雨後半の長雨にも負けず、水稲の作柄指数は全国平均一〇二の「やや良」となり、四年続きで豊作となる可能性が強まった。となると頭が痛いのは政府だろう。米の在庫処理が急務となったからだ。「米在庫処理」などという言葉は、食糧のなかつた時代から考えれば非常に腹立たしい言葉であるが、例年並に販売したとしても、来年の今頃は約四百から五百万トンの在庫がでるらしい。となれば食糧不足に苦しむ北朝鮮への援助に当てれば、と考えるのが我々日本人であるが、国産米一トンの約三十万円、輸入米一トンの約十万円の負担が必要で、二千万ドル規模の食糧援助では、援助米は十万吨にもならないらしい。となると生産者の不満は政府の政策に集中するわけだが、そう簡単なものではなからう。しかし現実には日本の食糧自給率は三十三パーセントを切っており、コマリメントでも「輸入してまで食べ残す、不思議な国日本」と耳の痛いキャッチコピーが流れている。せめて輸入米だけは何とかならないものだろうか。ところで古くから村まわりは秋に集中している。これは収穫に感謝し来年の豊作を願うところから始まったらしい。農産物は需要と供給のバランスがあるために、生産者の中にも他産地の不作を願う気持ちがあるのも事実だ。何にしても豊作は素直に喜びたいものだ。



真夏に涼をもとめて 各地区夏祭り盛大に

◇ 八月に入り暑い日々が続く中、各地区で夏まつりが行なわれ、子供からお年寄りまでが、魚のつかみどり、花火、盆踊りなど涼を求めて集まり大変な賑わいとなりました。

八月十日、桐林区民センターでサマーカーニバルが行なわれました。六時三十分から屋内では子供向け防火防犯のアニメが上映され、続いて小沢重貴子さんの歌謡ショーがありました。ショーでは区民とのデュエットもあり時間を忘れて盛り上がりました。屋外では金魚すくい、綿菓子、焼鳥、おでんなどの店が開き、賑わいました。九時すぎから子供たちの花火大会があり、その火が消えるにつれてカーニバルが終わっていききました。

今年で十九回目となった駄科夏祭りは、八月十五日公民館駐車場を会場に行なわれました。屋の部では「わんぱく相撲大会」が初めて登場しました。土俵に上がる子供だけでなく応援の親たちも、思わず力の入る取組が多く

同日の夜、長野原の金山神社裏の区民広場において長野原納涼夏祭りが行なわれました。夜空を彩る打ち上げ花火、真横に火が走



賑わいをみせる金魚すくい(桐林)



「のこった、のこった」わんぱく相撲(駄科)



壮年団も夜店で活躍(長野原)

たかと思うと「夏まつり」の四文字がくっきり浮かび上がった手作りのしかけ花火、威勢のいい太鼓の音に合わせ、輪になって竜峡小唄などの盆踊りを楽しませました。

オレンジのハッピー姿の壮年団が出した夜店も大変な賑わいを見せ、活気あふれる熱い一夜でした。

同日、時又でもサマーフェスティバル・イン・時又港と題し、時又港を会場に行なわれました。小雨が降ったり止んだりといったあいにくの天候の中、四トントラックの荷台をステージに変えて、生バンドの演奏を楽しみながら、生ビール、焼鳥、いか焼、フランクフルト、かき氷などの店が軒を並べ多くの区民で賑わっていました。時又の場合は

十枚つづりのサービスをあらかじめ購入し、買物をするシステムになっていました。又回覧板で回ったチラシに番号が振ってあり、会場で抽選会を行ない、様々な賞品と交換され大変な盛り上がりとなったため夜の部の盆踊りの時間に食込んでしまったほどでした。そして同じ会場を使って夜七時三十分ごろから太鼓に合わせて盆踊りの輪がつけられ、お盆ならではの風情を楽しんでいました。

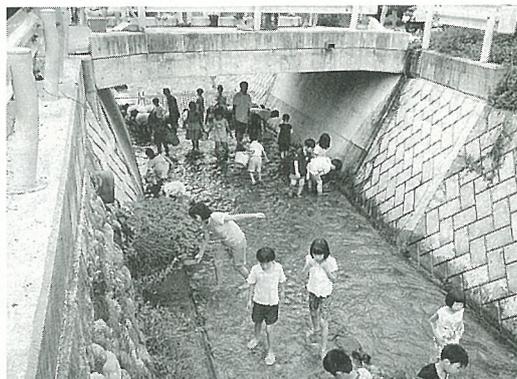
上川路では十六日に恒例の魚のつかみ取り大会が行なわれ、多くの子供たちが歓声を上げながら、楽しい一日を過ごしていました。

各地区、どこの会場も夏休み中ということで親子連れの参加者が目立ちました。が、平日頃、親子のふれあいの場が少ないと言われていた中で、これらの祭りが思い出に残る楽しい一時であったと思います。

どこも裏方さんは暑い中たいへんでしたが、これらの楽しい祭りがこれからもお盆の行事として長く続く様に地区民一体で盛り上げたいこうではありませんか。



小雨も気にせずバンド演奏(時又)



歓声を上げ魚のつかみ取り(上川路)

アイディア集団 上川路「ぼたんの里」

「ぼたんの里」は、上川路の発展のためにさまざまな構想を考へてきたアイディアを出し、会としてまとまった構想を区に提案しています。

上川路には、松くい虫の被害によって荒れてしまった区にマレットゴルフ場をつくり、憩いの場にしようという計画が進められていますが、これは「ぼたんの里」の提案が取り上げられた九名で、福岡計介会

利用をテーマにして研究を続けています。現在は、天竜川治水対策に伴い、久米川河川敷をどのように利用していくかをテーマに研究しています。

この方向で検討されています。今後、会として構想がまとまった段階で、区に提案されることとなります。

先のことですが「ぼたんの里」では、よりよい地域づくりのため、細部についても活発に意見を交わし、研究を続けています。



諏訪湖岸の整備状況を視察

公民館建設に向け 更なる熱意を

新竜丘公民館建設に向けては、各部会で熱心な検討が行われています。七月十四日に行われた建設委員会(総委員会)では、市に提出した要望書について、現在までの各部会の取り組みについて協議されました。

五月十五日に市長と教育長にあてて以下の項目の要望書を提出しました。

建設予定地は地元希望地である、桐林の前ノ原地籍にしていたきたい、建設予定地の取得面積は六千平米以上にしていただきたい、建物及び周辺施設はできる限り、地元希望に沿うようにしていただきたい。

各部会からの報告では、施設部会では小委員会を昨年十一月に設置し竜丘にふさわしい公民館を建設するために、今までに十回に及

ぶ会議を開催し、検討を進めています。また昨年十二月と六月には先進地の視察を行い写真づくりの参考にしてきました。

土地対策部会は昨年十月から建設用地の選定を進めてきました。三月には希望地の地権者にご参集いただき、地区としてのお願いを行っています。その他、自治会役員を中心に教育委員会へ出向き、要望の実現に向けて折衝を重ねている状況です。

要望書は提出しましたが、現状は、まだ飯田市の方針も確定したわけではなく、竜丘地区の熱意を示すことに中心が置かれています。市として歳出の削減が求められている昨今ですが、竜丘に住む住民みんなが考え、使いやすい公民館の建設を実現させていきたいと思います。

公民館五十年

いまも生きている公民館のうた

時又 伊藤 安正



公民館というのは、戦後文化的にめぐるれない町村の総合的な文化センターとして構想されましたが、それ以上に「村づくり」の発想が強くありました。戦後の大きな問題は、何と云っても荒廃した郷土の心には夢があり、歌を口ずさむといいますが、当時思えば、公民館の歴史と

公民館のうた
一、平和の春に あたらしく
郷土を興す よろこびも
公民館の つどいから
どけあう心 なごやかに
自由の朝を たたえよう

二、心の花に おやかに
郷土にひらく ゆかしさも
公民館の つどいから
希望をむねに 美しい
文化の泉 くみどろう

三、はたらくもの、安らかに
郷土に生きる たのしみも
公民館の つどいから
まごいになごむ ひどきに
明日へのちから 育てよう

再建ということでしたから公民館は、文化活動をその原動力としながら、いち早く生活安定のための生産活動・福祉活動、そして青少年問題など住民の生活要求に密着したかたちでその活

この歌は何の抵抗もなく人々の心に入るといって、いろいろな場所で歌われました。まさに、この歌は、復興の歌であり、村づくりの歌であつたわけです。さて、歴史は繰り返すと